

地方創生に向けた国際交流が始まる

2015年4月20日

京都府立大学教授 宗田好史

2014年11月、イタリアのミラノ市でオッセルバトリオ・アジアというアジアの文化や経済の研究所が、「危機の時代の日本における日本モデル」という国際シンポジウムを開催しました。私も外務省の日本ブランド発信事業による派遣専門家として「危機の時代の文化。イタリアは何ができるか」をテーマに講演を行い、地域・都市再生を模索する京都の事例を町家文化を中心に紹介しましたが、シンポジウムでは急激な少子高齢化と人口減少に向かう日本が模索する解決策をイタリアやアメリカなどの専門家と探る中で、アベノミクスの経済政策の効果に議論が集まりました。



【シンポジウムでの講演と会場の様子】

イタリアに限らず欧米諸国の貿易額は、今では日本より中国の比重が急速に高まっています。そのため、産業経済のパートナーとしてみる従来からの関心は薄れつつあります。しかし、長年低成長が続くイタリアは、同じ状況にある日本に深い関心を持ち、この難しい課題を日本ならどう対処しようというのが論点になりました。特に、都市再生と地方創生策に専門家の関心が集中しました。英語とイタリア語で語る講師は長年日本を研究した専門家で造詣の深い方々で、これまでの日本を紹介する一次的な議論ではなく、日伊両国の社会経済状況をよく理解した上で、具体的に政策モデルを論ずる二次的なレベルに踏み込んだ点に、時代の変化を感じました。

経済成長が鈍化し、人口も増えない欧米先進国でも、空港や高速道路などインフラ整備の効果はさほど期待できません。しかし、その国、地方特有の潜在力を発揮することで成長した例が欧米の都市には数多くあります。再生された歴史的町並みに集まった若いアーティストが活躍する数々の創造都市、毎年一つずつ文化首都を定め、集中的に文化イベントを開催して観光客を集めたEUの取組み半世紀以上続いてきました。金融経済の中心や、IT産業で成長した米国のシリコンバレーやサンベルトではなくとも、西欧諸国には創造的な政策で再生した地方都市が数多くあります。

米国の旅行雑誌『トラベル&レジャー』誌の読者投票で、2014年には京都が、パリやローマを抜いて訪れたい都市の第一位に選ばれました。実際、円安の影響もありますが、京都は外国人観光客が急増しています。この会議で、私は最近の京都の創生策を文化・観光政策を紹介しました。修学旅行でお馴染みの社寺でなく、近年の町家ブームや京料理を通じて、日本の古都は常に新鮮な発見を観光客に提供しています。特に、2007年の新景観政策で、建物の高さ規制や屋外広告物規制の強化、新築建物のデザインガイドライン、眺望景観規制、町家再生の助成などが奏功し、その町並みが日々美しくなっています。数々の名刹や名勝庭園だけでなく、街中を歩き、再生された町家で若いアーティストや職人が経営する小さな店の美しさが際立ってきました。

実は、この動きは京都だけのことではありません。全国に百ヵ所以上ある重要伝統的建造物群保存地区の多くでも、美しくなった町並みにお洒落な店が増え、観光客を集めています。過疎化が進む地方都市では中心市街地と呼ばれる都心の商店街は閑散としていても、昔の町並みが再生され、その土地ならではの佇まいのある地区に店が増え、訪問客が集まるのです。

ミラノのシンポジウムで、私は京都創生の事例を新しい発展のモデルとして紹介しました。特にその背景に、近年では高齢化の影響で観光客の平均年齢が50歳近くなっていること、観光客の7割近くを女性が占めていることを示しました。また、この傾向が京都だけでなく日本全国に共通し、イタリアなどでも見られる社会状況と述べたために、イタリア側の関心が集まりました。熟年女性は歴史ある町並みを好み、その中にシックなレストランや小洒落たブティックがあれば、繰り返し訪れてくれます。観光の初心者と違い、大人のリピーターは名所旧跡よりも、その街に潜む固有の魅力を求めています。京都では、「暮らすように旅する」といって、街中の町家ホテルに数日滞在し、和装で出かける大人の女性が増えています。舞子のコスプレほどには目立たないため、市民と区別がつかないのですが、市内の美術館や骨とう品店、能楽堂の賑わいの一部は遠来のお客様になっています。その意味で、京都もフィレンツェやローマに近づいているのです。

だいぶ減ったとはいえ、京都にはまだ4万8千軒の京町家が残されています。その大部分は老朽化し、高齢者が暮らし、15%もの空き家があります。20世紀末までは、町家や長屋を壊してマンションやビルにすることが一般的でしたが、最近では年間千軒ほどのペースで町家が売買され、住宅や店舗として再生されるようになりました。イタリアなど西欧の歴史都市で1970年代以降進んだ歴史的建造物の保存と再生が京都でも本格的に始まり、創造的な仕事をする若者を集めています。だから観光客も千年の都に文化財だけでなく、若い作家を探して回るようになりました。

2015年は、本阿弥光悦が家康公より鷹峯の領地を賜って400年になることから琳派四百年を祝う様々なイベントが続きます。京都国立博物館など数々の美術館で光琳や宗達をみることもできますが、木村英樹や山本太郎など現代琳派と呼ばれる画家たちの作品は一層楽しめます。同世に、古い町家や社寺には最新の作

品・商品が置かれ、現代のハイブリッド文化が楽しめるから創造都市として人を惹きつけます。つまり、京都は古いからではなく新しいから人を呼ぶ、この点に、文化、景観、観光を軸に京都市が進める京都創生策のポイントがあります。

2015年4月、姉妹提携50周年を祝うため京都を訪れたフィレンツェのダリオ・ナルデッラ市長一行は、長年の両市の文化・芸術交流を、より創造的な両市のビジネス拡大に取組みました。フィレンツェ市のファッション・ブランド「サルバトーレ・フェラガモ」は、国宝二条城を展示会場に、伝統ある名品を並べ、京都の織物会社とコラボしたコレクションを発表しました。清水寺や醍醐寺、東福寺なども展覧会、ファッションショーによく使われます。加えて、イタリア総領事の公邸は、鴨川沿いの町家を最近改装した建物で、イタリア大使も駆け付けたレセプションでは、市内のイタリア・レストランのシェフが京野菜を使ったイタリアンを提供しました。

また、京都では「パラソフィア：国際現代芸術祭」も開催されています。この中で、「アール・ブリュット」シンポジウムが開かれ、「京都で、日本の天才アーティストをめぐむ。」を合言葉にNPO法人天才アートミュージアムが、障害のある方々の高い創造性と芸術性を発信した「天才アートミュージアム展」に注目が集まりました。アートは、こうしていろいろな効果を生み、社会の様々な人々に活力をもたらします。

フィレンツェ市には世界最古の捨子保育院があり、赤ちゃんポストが残っています。児童福祉、教育行政に明るい門川京都市長の熱心な説明に感銘を受けたナルデッラ市長は障害を持った児童の芸術教育プログラムに個人として寄付を下さいました。華やかな琳派やパラソフィア展だけでなく、街中のアーティストや職人、そして子供たちを巻き込んで、文化芸術都市づくりが進んでいるのです。一月ほどで京都市交響楽団が「5月フィレンツェ音楽祭」に参加し、日伊の交流が一層進みます。

困難な時代にもまた、国際交流を通じてえるものがあります。地方創生の柔軟な知恵の数々は、ヨーロッパの小さな町や村から得られるものかもしれません。京都は、その再生策に文化・芸術・観光面で比重を高めますが、これ以外にも手工業、オーガニック、スローフードの農林業など地方だからこそ活かせる21世紀の工夫を世界から吸収することに期待が集まります。

関連情報

- [オッセルヴァトーリオ・アジアのシンポジウム「危機の時代における日本モデル」](#)(在イタリア日本国大使館による開催報告)
- [町家文化と再生～危機の時代の文化市民参加のあり方～](#)(上記シンポジウムへの専門家派遣を含む日本ブランド発信事業による概要報告)
- [日本ブランド発信事業](#)(外務省による海外への専門家派遣事業)